

大連の詩人たち

——詩誌『亞』と地政学——

西村将洋

一、はじめに

従軍記者として日清戦争に参加した国木田哲夫は一八九四年一月一日に千代田艦の甲板で見た風景を次のように記している。

陸上見渡せば、只だ茫々として天際に接する処、凡て平陵なり。四五百尺より六七百尺に至る山、之れを沿岸に連互する高峰とす。和尚島の山は百尺を出でず。只だサンプトンス峰のみ、支那人の所謂大黒山、突元として平野を抜き、高さ二千尺を出づ。満目凡て大陸の象を示す。樹木少なく、断崖多し、人屋稀に、風景蕭殺たり^①。

「風景蕭殺たり」と記されたこの地は、もともと青泥窪口や三山海口と呼ばれる場所だった。日清戦争後には、租借権を獲得したロシアによって港湾都市の建設が始まり、さらに日露戦争後に日本に

よる都市建設が進められる。その頃には、土地の名はロシア名タルニーに因んで大連と呼ばれていた。先に挙げた国木田哲夫とは、言うまでもなく若き日の国木田独歩のことである。この文章は、日露戦争終結から三年後の独歩没後に初めて『愛弟通信』（左久良書房、一九〇八年一月）として刊行された。紅野謙介が言うように「独歩が想定した『海上砲煙』『艦隊戦列』『艦上詩趣』といった『売れさうな』題名ではなく、『愛弟通信』という題を選んだことに、日露戦後の「戦争文学」のとらえ方があった。すなわち、国家を主体とした戦争と、「愛弟」へ寄せる作家の個人的な通信を結びあわせること。（略）それによってこそ、初めて「戦争文学」は成立^②したのである。ちなみに、先の引用文から約一ヶ月後、一月二三日の箇所では、大連は次のよう書き留められている。

若し千代田艦上に立つ、日已に落ちんとする時西の方を眺め

よ。短き冬の日の光将に入らんとす。淡色蒼然たる連山の天、今や燃ゆるが如し。ヴィクトリヤ澳遠く煙をこめて微茫蕭条たり。日を背ふ山々のうち一個。その形ち富岳に似たるあり。何となく美なり。^③

「蕭殺」たる風景から「富岳」への転換。恐らくそこには旅順での戦勝を経て再び大連に戻ってきたことが関与していたのだろう。この土地は故郷日本の地と同じように、「愛弟」と共有可能な場所に変貌したのである。場所が変わったのではない。その場に存在する身体感覚が変容したのである。

本稿は、この大連で刊行された詩雑誌『亞』の周辺で発生した問題点を探る試みである。

二、大連の『亞』、東京の『面』

『亞』（一九二四年一月創刊）の発端は、一九二三年の夏に北川冬彦・城所英一・富田充の三人が安西冬衛宅を訪問したことに始まる。この三人は同じ旅順中学校の同級生であり、当時は東京に進学していた。その三人が大連へ帰省した際に、雑誌創刊の話を持ち上がったのである。この時の様子は、北川の回想文では四人の円満な様子が綴られているが、安西の側からすると事情は異なっただろう。^④ 安西はその時の様子を「対決」と呼び、「東京」で雑誌を創刊する

という城所の提案を退け、「大連」での雑誌発行が決定したと言っているのである。^⑤

こうした安西の回想と呼応するように、第三号（一九二五年一月一日）以降、北川ら三人は『亞』同人を退くことになる。そして彼らは、福富善兒が中心となって東京で発行した雑誌『面』（一九二五年二月創刊）に参加した。^⑥ 福富善兒とは後述「詩の展覧会」に加藤輝の名で参加している人物である。もともと『亞』創刊の直前まで、北川・城所・富田・福富の四人は東京で『未踏路』という同人誌を発行していた。^⑦ その雑誌が新たに『面』として再出発したのである。それは東京での活動拠点の確保をも意味していた。彼らにかわって、『亞』には瀧口武士が同人に新加入し、加藤郁哉・水原元子（北川冬彦の妹）らも寄稿するようになる。ちなみに、北川冬彦は、東京に拠点を移しながら、その後も『亞』に度々寄稿した。彼の活動の場は、大連と東京の二極にまたがっていた。

その後、次第に『亞』『面』の二誌は注目を獲得していった。一九二五年五月、『新進詩人』（九巻一号）では、正富汪洋「短詩の流行」が『面』の短詩を好意的に取り上げている。^⑧ だが、その存在を決定的にクローズアップさせたのは、萩原朔太郎の発言だった。「日本詩人九月月号旦」（『日本詩人』五巻一号、一九二五年一月一日）で、朔太郎は「最近、安西君等の雑誌『亞』でやつてる二、

三行の印象詩は、一つの新詩形としても注目に値する。」と言い、その意義を認めたのである。続く『日本詩人』五卷一、二号（一九二五年一月一日）の詩壇諸家「十四年度作品批評」では、百田宗治ら七人が『面』について、『亞』については加藤介春ほか八人が肯定的に取り上げた。詩人名としては、高木斐瑳雄が北川冬彦に、大藤治郎ほか三人が安西冬衛に注目している。こうして二つの同人誌は、詩壇での位置を獲得していった。この後も「昨年あらはれたる有望な新進詩人」（『詩神』二卷一号、一九二六年一月一日）では、高木斐瑳雄が再び北川冬彦の名を挙げ、藤田健次が安西冬衛に言及している。また、彼らが試みた短詩という技法についても、多くの追隨者が出現した。一九二六年二月から雑誌『詩神』で「現代短詩」の欄が設けられたこともその一例と言えよう。この欄は一九二七年三月まで継続された。

三、短詩争奪戦

このような『亞』『面』の台頭という状況の中で発生したのが、正富汪洋と福富菁児の論争だった。その発端となったのは、一九二六年一月『新進詩人』（九卷一号）掲載の、正富汪洋「短唱運動」である。この中で正富は、「新体詩なるものが起つて以来、四行詩や五行詩は時々試みられた。然しこれを盛んにしようと特に努力し

た運動は、過去に於て認めない。我々は、この運動を試みやうとするのだ。」と自らの革新性を宣言した。「短唱」とは、「四行又は五行」の詩のことであり、「空行をも一行として計算」と規定され、短歌の三十一字の制限を打破すること、「唱ふに適することを目的とした」詩を確立することが目標とされた。

一方、福富菁児は、前述『面』の終刊後、その後雑誌として『犀』を創刊している。『犀』第一輯（一九二六年三月一日）の福富「閑房襍記」では、「一九二五年度に於ける私達『面』同人の短詩運動は、従来の芸術が余りに約束や独断に拠る説明に墮し、私達の観照を制限したことに對する破壊だった」のであり、「表現及び観照の拡充」を實踐し、「四次元の世界に、吾々の余りに人間的な生命を解放しようとした」と、その活動を総括している。その福富が正富に異議申し立てを行った。「短詩運動に就いて」（『犀』二輯、一九二六年四月一日）で、福富は次のように詰問したのである。

『短唱』にしる『短詩』にしる『短い詩』であることにちがいひないのですから、それならあなたが此の一月にこれを試みられたより一年以上前に私達（城戸又一・横井潤三・北川冬彦・城所英一・福富菁児の五人）は『面』といふ雑誌を發行し、それに拠つて専ら短詩を提唱し運動をしてゐます。それはあなたも其年の五月号の『新進詩人』で『短詩の流行』と題して吾

々のことを書いて下された位ですからよく御存知の筈です。が、この一月号の『短唱運動』の中であなたは(略)吾々のあの運動を綺麗に黙殺なされてゐられる。否、黙殺なさらうとしてゐられる。

この発言を受け、『新進詩人』九卷五号(一九二六年五月一日)には、「短唱と短詩」が掲載され、弁明がなされた。正富は短唱運動について、かつて幸田露伴が不徹底のままに終わらせた「四行詩や五行詩」を、運動の次元まで高めることに真意があるのだと述べ、さらに近年の短詩の元祖と言えば、大正一〇年前後に西村陽吉が試みていたこと、その他に平野威馬雄や、福原清の雑誌『羅針』、『亞』、深尾須磨子についても言及し、『面』のみが先駆性を持つわけではないと反論したのである。

ここから、二人の論争は、詩壇を巻き込みつつ、泥仕合の様相を呈してゆく。その一因となったのが、先に正富が述べていた歌人の西村陽吉である。一九二二年六月一月に、西村は俳人の金兒農夫雄らと『我等の詩』(全六冊)発行し、和歌・短歌・俳句等の定型詩への反発と新短詩形芸術の模索を行っていた。その西村らが、福富・正富論争の渦中に『第一短詩集』(素人社、一九二六年三月一日)を刊行したのである。この詩集の刊行は、単に短詩の元祖争いという意味のみならず、複雑な問題を顕わにした。なぜなら、こ

の詩集には北川らが脱退した後に『亞』に加わった加藤郁哉も参加していたのである。福富は『面』の先駆性を主張しながら、『亞』への言及を回避していた。そこには、先駆性についての負い目もあったのかもしれない。その『亞』には、『我等の詩』同人もいたのである。『第一短詩集』について、福富は、詩と短歌・俳句の違いに言及しつつも、その「両極端より発し其の会する点は同一なものである事を私は識つた。」¹⁷⁾と評価の言葉を贈つた。

だが、事態の進行はこれに止まらなかった。前述「十四年度作品批評」(『日本詩人』五卷二二号、一九二五年二月一日)が、詩話会の『日本詩集1926版』(新潮社、一九二六年五月二二日)に再録されたのである。このことは『面』『亞』の詩壇での認知度をさらに高めたし、これにより福富青兒は勢いづいた。福富は「再び短詩運動に就いて」(『犀』四輯、一九二六年六月一日)で再び正富汪洋に反駁し、元祖という問題ではなく、現詩壇における『面』の重要度は黙殺できないと、訴えたのである。この前後、論争はさらに拡大していた。例えば、伊福部隆輝と角田竹夫は、短詩の元祖として北原白秋と萩原井泉水に言及し、これに対して福富は現詩壇での重要度という論点を再度主張している。また、安斎一安を中心とした短詩社が、一九一五年から同人誌『短詩』を創刊していたなどという主張も現れ、短詩の元祖争いは混沌としてゆく。¹⁸⁾さらに正富汪洋に

至つては、仮想敵が幸田露伴だったことに再度言及しつつ、福富の反論に閉口してしまい、最終的には「面」からの影響の有無について、「僕の頭脳の中のことだ。」と開き直りとも言える姿勢を見せた¹⁵⁾。こうした論争自体は不毛と言えるかもしれない。だが、ここに新たな芽の萌芽があったのである。しかし、そのことを見る前に一度、大連に眼を転じておきたい。

四、詩の展覧会

一九二四年前後、文学者のパフォーマンスという現象が発生する。その一つが「詩の展覧会」であった。一九二四年四月には日本無産派詩人連盟展が開催され、伊福部隆輝や秋山登も詩展に言及している。また、萩原恭次郎らの雑誌『赤と黒』も詩展を目論んでいた¹⁶⁾。前述「未踏路」同人であった頃の富田充・城所英一・北川冬彦の三人もまた、一九二四年八月に詩展を大連三越呉服店で開催した¹⁷⁾。この第二回展として企画されたのが、亞社主催「第二回 詩の展覧会」（一九二五年八月六―八日、於・大連三越呉服店）である。

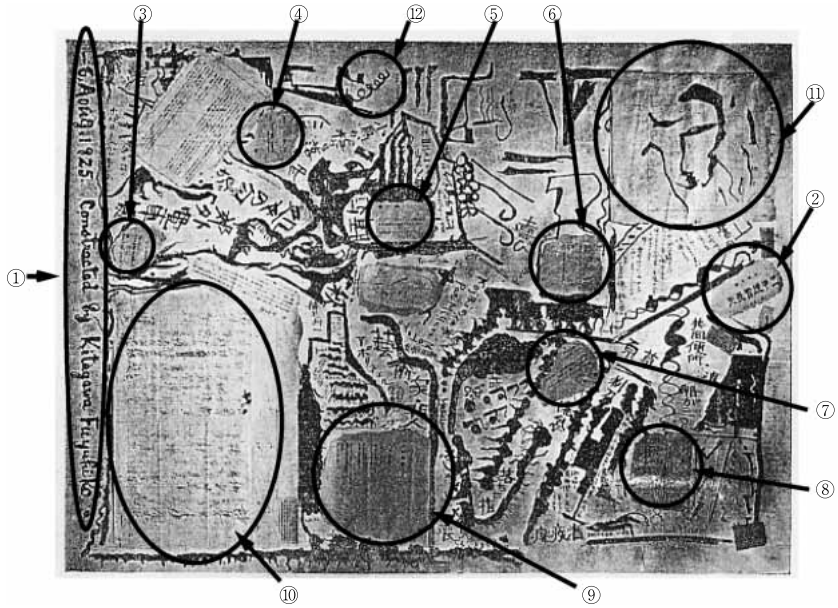
この展覧会は、「亞」と「面」の同人らが合流したもので、その内容については、第一二号『亞』（一九二五年九月一日）ではその全容が確認できる。特に注目できるのは、図版入りで紹介された、北川冬彦「詩集三半規管喪失のコンストラクション」であろう〔図

1〕。左端①の部分に「-6. Aoug [t]. 1925. Constructed By Kita-gawa Fuyuhiko.」と記されたこの作品は、題名が示すように自らの詩集『三半規管喪失』（至上芸術社、一九二五年一月一日納本・発行日の記載なし）を引き裂き、その断片を画面に構成したものである。右端②には詩集の表紙が無造作に貼り付けられているのも確認できる。同じく『亞』に収録された、武井濂「亞社主催になる詩の展覧会評」は、この作品を次のように評した。

北川冬彦「詩集三半規管喪失のコンストラクション」瀧口君の「蚕」と並んで、場内の二つの焦点をなしてゐる力作だ。メスの様な鋭い熾烈な精神が観るものを圧倒する。「草原」「瞰下景」「共同便所」「冬」「喜び」「倦怠」「落日」「秋」の八篇の詩が、寸分の動きのとれない程正確に、怪しくも魅力のある絵の間にコンストラクトされている。

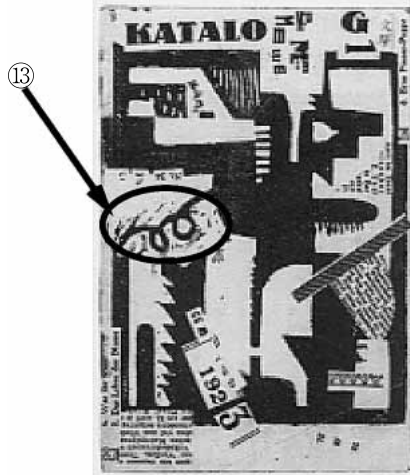
確定とは言えないが、「図1」を可能な限り分析したところ、武井が示した『三半規管喪失』収録の八編の詩のうち、③の部分には「秋」が、④には「冬」が、⑤に「瞰下景」が、⑥に「喜び」が、⑦に「倦怠」が、⑧に「草原」が、⑨の部分に「共同便所」があると判読できる（但し「落日」は不明）。だが、全体を見てもわかるように、⑩の原稿用紙（冒頭に「詩集三半規管喪失」とある）や、他にも活字の切れ端が複数確認できる。また⑪の肖像画は、後に

〔図1〕 北川冬彦「詩集三半規管喪失のコンストラクション」



大連の詩人たち

〔図2〕 マヴォ第一回展カタログ
(1923. 7. 於：浅草伝法院)



『彷徨月刊』（一八九号，二〇〇一年五月）より

『検温器と花』（ミスマル社、一九二六年一〇月二五日）の挿画にも使われた「PORTRAIT DE L'AUTEUR PAR LUI-MEME」であることがわかる。それに見逃せないのは、⑫の渦巻き線であろう。これはマヴォの作品の中で多用された図柄であり（「図2」マヴォ第一回展カタログの⑬を参照）、北川とマヴォの連続性を明証している。

以上の点から確認できるのは、この北川の作品には、マヴォで意識的構成主義を標榜した村山知義らのダダ的なアンサンブラージュの反映が認められることである。但し、村山の代表作《構成（コンストルクチオン）》（一九二五年、東京国立近代美術館蔵）が、斬新なショットの写真や木片などを構成していたのに対し、北川の場合は「詩集」という物質的なモノを切り裂き、貼り付けているという差異がある。そこには、自らの言葉さえも物質化しようとする意識の転換があると言えよう。村山知義は「構成」といふ言葉は今や何等の抽象的内容を有せず、物質を素材として空間的なるものを組み立てる^⑭と主張していた。一方、北川の場合には、手書きで書かれた詩の一部や、画面中央の右寄りにある電車の絵などが、異様なまでの精神性を帯びて表現されており、その意味で「抽象的内容」を含むとも言えよう。北川の作品の中に構成された詩「草原」で、電車はこんなふうに登場する。

「日露戦争と近代の記憶」

緑の草原を

刃を立てた二本の剃刀がよぎつてゐる

その上を 電車がしづしづ渡つて来た

凝めてゐると

俺の指がぱつたり切り落とされた

ここで、さらに続けて、当時北川の理解者の一人でもあった春山行夫の「紙上建築」〔『犀』四輯一九二六年六月一日〕を見ておきたい。春山は「亞」「面」の二誌と『新進詩人』との差異について、次のように言っている。

「亞」と「面」の未来主義も認めなくてはならぬ。（略）一体、『新進詩人』の短唱が主張するように…引用者注 空行を一行に勘定するなどは、マラルメ一派の「行間の詩」に主張されてゐるところで、（「亞」「面」による…引用者注 未来主義（未来派に非ず）の Spor 構成派（造型美術——分離建築）の、全体に対する部分、即ち Scade の主張に対しても古いと見た。

最後の「Grade」については不明だが、それ以外の部分からは春山の主張がおおよそ推測できる。春山も言うように「未来主義」と

は、イタリア未来派などの系統ではなく、本稿第二節で福富菁児が触れていた「四次元」から得られた解釈だろう。周知のように、インシュタインは三次元の領域に第四次元（時間）を導入していた。ここでは現実を（未来に向けて）突き抜けてゆくイメージが提起されている。「Spat 構成派」については「造型美術」「分離建築」の注釈もあるが、「全体に対する部分」という言を注目したい。詩「草原」でも、第二連と第三連は、触れずとも見詰めるだけで切れてしまう「二本の剃刀」（線路）の鋭さ、その物質性へと収斂している。

その意味で「詩集三半規管喪失のコンストラクション」と「草原」は表裏一体の関係にある。前者が構成された詩集の背後にある精神性を表現するとすれば、後者ではその精神性が、「俺」にまで迫る剃刀（線路）の切れ味という一点（Spot）に向かって、最大限に集中されている。「詩集三半規管喪失のコンストラクション」の筆致の強度は、詩の表現の強度へと凝縮しているとも言えよう。先に武井濂が「メスの様な鋭い熾烈な精神」と評していたのは、そうした両者の構成（融合性）を踏まえての発言と考えられる。そして詩「草原」の表現は、村山が述べた「構成」の原理をも体現している。そこにあるのは、抽象性を極度に削り、物質の素材感（触覚性）を剥き出しにさせ、空間的に構成する作業である。こうした

表現は、『亞』について度々言及されてきたように、俳句やルナールといった短詩からの影響²⁰⁾、さらに題材と目される大陸の環境に間違いなく多くを負っているわけだが、それと同時に、そこには紛れもなくマヴォのエッセンスも変奏され、そして流入していた。

五、短詩の問題系

このように短詩に対する論議と表現の試行錯誤が行われていた中、堀口大学によって一石が投じられた。一九二六年八月二一―四日の『東京朝日新聞』に掲載された「短詩型流行と産詩制限」（全三回）である。この中で堀口は、最近「地方の同人誌」に発生している短詩流行は、「詩を害する」ものであり、一行・二行で記された「口から出まかせ文句」と言い、次のように述べたのである。

これら（の短詩：引用者注）はフランス近代詩——殊にジャン・コクトオあたりの影響であるらしい。またダダとか、構成派とか、立体派とかいふやうな既成概念の破壊を目的とする運動の影響であるらしい。²¹⁾

このように堀口は短詩の流行を「フランス近代詩」の模倣として一蹴し、「彼ら（コクトーやアポリネール：引用者注）は在来の美、在来の詩に対して、それ等の忠実なるじゅん奉者達よりも一層注意深く、一層鋭敏であつた²²⁾」と述べ、日本の詩人も「古風な詩型にま

で立ちかへつて、更にそこからあらためて出なほす²³⁾ことを提言したのである。このような見解自体は、南江二郎「短詩に就て」(『詩神』二巻五号、一九二六年五月一日)などでも同様に提起されていた。しかし、一九二五年九月に訳詩集『月下の一群』(第一書房)を刊行した堀口大学の見解であったことこそが、詩壇に対して大きな問題性を提起することとなったのである。先に、詩の展覧会等を通じて短詩における実践性を概観した。そうした視野から判断するならば、堀口大学の批判は幾分の理解を欠いている。そこには模倣に止まらない表現の模索があった。しかし、この堀口の批判は別の意味での「短詩」に対する思慮をもたらしした。「短詩」とは何であるのかを、根本的に思考する視点が芽生えたのである。

例えば、正富汪洋「詩歌小感」(『新進詩人』九巻一―号、一九二六年一月一日)は、堀口の見解に対して、ヨーロッパのソネットや漢詩の絶句といった東西の詩と「短唱」との同一性を主張し、自らの運動の正当性を主張した。だが、ここではヨーロッパの詩を一枚岩のものとして捉える視点が依然として残存している。堀口が述べたコクトーラの詩は、前代のものを乗り越えるかたちで発生したのであり、正富の理解は十分とは言えなかった。しかし、表現の問題を歴史的社会的に見る眼がそこには確かに存在している。

一方、春山行夫は『詩神』三巻三号(一九二七年三月一日)に

「短詩の新研究」を発表し、短歌・俳句・絶句・ソネット・立体詩など、古今東西の短詩形文学を歴史的に把握しようと試みている。

ここには、正富とは多少異なり、歴史的な表現の位相を考慮に入れたようにする視点が発生していた。『厚』第七輯(一九二六年一月三日)には、北川冬彦「タイラント、堀口大学!」が掲載された。

堀口氏は短詩型の流行を、一概に、近時しきりに翻訳された仏蘭西近代詩の影響と断定してゐるが、近代芸術の特徴は、その新精神(Deformation)と表現手法の単純化とに在り、それは必ずしも仏蘭西芸術のみに於ける現象ではなく、コスモポリテイックなものである。(略)コクトオの詩はまことにいい。何ぜいいか。それはわれわれ日本人の詩的精神と一脈相通ずるところのものがあるからである。(略)コクトオは所謂Haikai(チエンバアレンのいふところの Epigrammes lyrique du Japon)の影響をうけてゐるが故にわれわれと一脈相通ずるところがあるのではあるまいか。

正富汪洋や春山行夫が歴史的な視点から「短詩」に眼を向けたとするならば、北川はHaikaiを契機とした「短詩」の世界同時に眼を向けている。「短詩」という問題を起点として、そこでは垂直方向と水平方向の視野が開示され、その上で表現することの問題性が浮上していたのである。

六、大連の詩人たち

以上、本稿は、ある意味で意識的に、東京の詩壇を中心とした短詩の問題系を概観した。言うまでもなく、『亞』で展開された短詩は、大連という歴史的な環境に成立したのであり、場の問題と詩との関連を見過ごすわけにはいかない²⁴。しかし、それと同等に『亞』は詩壇の中心であった東京の動向にも間違いなく関与していた。エリス俊子が指摘するように、そこには「日本の「内」にありながらコスモポリタンな感覚を享受できる空間」が現前していたのだと言えよう²⁵。そうした詩の世界同時性とともに、詩の歴史性を再検証し、さらにアヴァンギャルドの実験をどのようにして詩の問題として引き受けてゆくか、といった複合的な問題点が、短詩という場には発生していたのである。

一九二七年二月一日、『亞』は第三五号で終刊する。その際、雑誌には「亞の回想」として、錚々たる面々（全六〇人）の回想が添えられた。中には上田敏雄、田辺耕一郎らの辛辣な批評も掲載されたが、回想文はおおむね好意的だった。例えば、高村光太郎は「『亞』の気魂は詩精神の烈しさを私に示しました。」と言い、草野心平は「『亞』は日本詩史に残るべき仕事をした事を考へさせられます。」と記している。こうした評価の背後にあるのは、『亞』終刊

を短詩の終焉と連動させるという認識だった。山崎泰雄の「尖鋭な短詩形と清新な印象的手法は節制の弛緩に陥りかけた傾のあつた一時の詩壇に、清冽な転向を促した功多きものと思ひますが、中でも『亞』はさうした貢献の多くを遂げたものでした。」という見解や、橋爪健の「日本に於ける短詩運動の使命は、充分果たし得た事をお慶び申し上げます。」という言葉には、そのような意図が含蓄されている。

そして、こうした見解と同時に、もう一つ顕著な傾向がある。それは、短詩運動の中心と規定された『亞』を、遠くの地、大連というノスタルジックな表象の中に囲い込むような発言である。新居格は「広い平原にさく桜草のやうに思はれてゐた」と言い、角田竹夫は「香り高い異国の煙草と詩が消えてしまうことは惜しみても余りありません。」と記している。かつて『亞』同人だった富田充は「『亞』は恒に晴朗で明晰で典雅であつた。『亞』が満州の辺境から中央詩壇い傲然君臨した所以はそこにあつた。遠く黄海の潮を超へて『亞』が呼びかけた声は無限の魅力に充ちたものであつたことを誰しも否定しないだらう。」と感情を込めて懐かしんだ。全てを大連の土地に封印するかのよう。

本稿冒頭では、国木田独歩が大連を自らの故郷の地と同化するこゝとで、その大地に対する親和性を獲得する経緯について触れた。こ

れに對して『亞』の短詩運動は、大連という大地の想像力を助けとしながら、東京で提起された詩の可能性を実験し、さらに東京の詩壇に想像力を充填するものであったと言えるかもしれない。だが、『亞』終刊に顕在化したのは、これらのものとも別の現象だった。先に記したような短詩が提起した諸問題（前衛芸術との関連性・詩の歴史性や世界同時性）は、『亞』終刊とともに、大連という土地へ封じ込められ、風土化（封土化）されたのだと言えよう。^⑤そこには明確な切斷の意識が存している（当然そこには「亞の回想」を企画した『亞』編集者の戦略性も内在していただろう）。そして、最終的に用意されていたのは、独歩の場合と同様に、郷愁と安定した場所の獲得だった。日本と大連との境界線を、ある時は無化し、ある時は強調する地理的な政治学がそこにはある。大連を含みかつ切斷しながら境界線は移動していたのである。そして、最終的な切斷という操作によって、『亞』の當為は「日本詩史」（草野心平）の中へ、「大連の詩人たち」として明確に区分され、編制されるだろう。最後に、「亞の回想」へ贈られた佐藤惣之助の俳句を挙げておく。

西方の亞字あか〜と枯野かな

注

① 国木田独歩「大連湾進撃」（『愛弟通信』左久良書房、一九〇八年一

「日露戦争と近代の記憶」

一月二三日、所収。なお、『愛弟通信』からの引用は全て『定本 国木田独歩全集 第五卷』（学習研究社、一九九五年七月）に依った。

② 紅野謙介「創造の戦争 戦場の記録」（『日露戦争スタディーズ』紀伊国屋書店、二〇〇四年二月、所収）。

③ 国木田独歩「大連湾雑信」（前掲『愛弟通信』所収）より。

④ 北川冬彦「『亞』と『面』」（『本の手帖』三号、一九六一年五月）を参照。

⑤ 安西冬衛・池田克己・佐藤賢二・花村葵・深尾須磨子「速記者・滝口雅子」『雑談』（『時間』一三三号、一九五二年三月）を参照。

⑥ 詩話会編「日本詩集」[G]版（新潮社、一九二六年五月二日）の「大正十四年詩壇の主なる事項」の二月の欄には、福富菁兒によって『面』が創刊されたとある。但し、『面』は現物未確認。

⑦ 桜井勝美「北川冬彦ノート」（『北川冬彦の世界』宝文館、一九八四年五月所収）は、雑誌『ル・ブラン』（二号、一九二四年一月）表紙裏の「未踏路社同人」欄に、富田充・福富菁兒・北川冬彦・城所英一の名があることを報告している。

⑧ この正富汪洋「短詩の流行」は現物確認できなかった。但し、正富汪洋「短唱と短詩」（『新進詩人』九巻五号、一九二六年五月一日）から、その内容の一部を確認した。

⑨ 『新進詩人』一九二六年一月号は現物確認できなかった。但し、福富菁兒「短詩運動に就いて」（『厚』二輯、一九二六年四月一日）にその一部が引用されており、本論ではその部分を再引用した。

⑩ 正富汪洋「短唱とリメリック」（『新進詩人』九巻二号、一九二六年二月一日）より。

⑪ 正富汪洋「詩歌小感」（『新進詩人』九巻二二号、一九二六年二月一日）を参照。

- ⑫ 福富青児『第一短詩集』読後感（『犀』三輯、一九二六年五月一日）より。
- ⑬ 福富青児の「それはそれ これはこれ」（『犀』六輯、一九二六年八月一日）、『弁疏ニツ』（『犀』七輯、一九二六年一月三日）を参照。
- ⑭ 同人誌『短詩』は少数部しか現物確認ができなかった。但し、安齋一安の還暦を記念して刊行された、『一安短詩集』（短詩社、一九二八年七月一日）で、その全貌はほぼ確認できる。
- ⑮ 〔正富〕汪洋「福富君に答ふ」（『新進詩人』九卷七号、一九二六年七月一日）を参照。
- ⑯ 五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』（改訂新版、スカイドア、一九九八年六月）第一〇章の注三五を参照。
- ⑰ この詩展については、安西冬衛「展覧会にあたりて」（『亞』一一号、一九二五年九月一日）を参照。
- ⑱ 詳細は、前掲、五十殿利治『大正期新興美術運動の研究』の第九章を参照。
- ⑲ 村山知義「構成派批判」（『みづゑ』二二三号、一九二四年七月三日）より。
- ⑳ これらの点については、安藤靖彦『『亞』の短詩』（『日本近代文学』五四集、一九九六年五月）などを参照。
- ㉑ 堀口大学「短詩型流行と産詩制限【一】」（『東京朝日新聞』一九二六年八月二二日朝刊）より。
- ㉒ 堀口大学「短詩型流行と産詩制限【二】」（『東京朝日新聞』一九二六年八月二三日朝刊）より。
- ㉓ 堀口大学「短詩型流行と産詩制限【三】」（『東京朝日新聞』一九二六年八月一四日朝刊）より。
- ㉔ 例えば、和田博文「大連のアヴァンギャルドと北川冬彦」（『環』

Vol.10、二〇〇三年七月）などを参照。

- ㉕ エリス俊子「表象としての「亜細亜」」（『モダニズムの越境（第一分冊）』人文書院、二〇〇二年二月）を参照。

㉖ 拙稿「神奈川近代文学館蔵 俳句雑誌『風流陣』総目次」（『同志社国文学』五九号、二〇〇三年二月）の「解題」では、こうした問題が再帰する過程の一部を論及した。論中の「封土化」については、オギユスタン・ベルク、中山元訳『風土学序説』（筑摩書房、二〇〇二年一月）を参照。

〔付記〕

詩誌『亞』原本の閲覧、北川冬彦「詩集三半規管喪失のコンストラクション」図版の掲載については、堺市立中央図書館（安西冬衛文庫）の御協力を、「マヴォー一回展カタログ」については、村山治江氏、彷徨舎『彷徨月刊』編集部を御協力をお願いした。この場をかりて厚く御礼を申し上げます。

なお、本稿は科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。